

私は千葉県柏市で生活安全産業の一翼を担うべく、警備会社を展開する会社経営者です。ぜひ、新卒高校生の方々に当社の門をたたいて頂きたく、先生方、学校関係者の皆様に日頃から、経営者として思うこと、感じていることを綴ります。文化・芸能・教育・社会・経済・企業の問題を一緒に考えていきたいです。当紙の題名は私の人生訓であり、モットーでもあります。



「〇〇は凄かった」からの脱却



当社では夏の甲子園大会県予選開会式会場の駐車場警備のお仕事を毎年いただいております。私も高校野球の大ファンのひとりです。

それにしても、昨今の高校野球選手の鍛えこまれた体格を見るにつけ、確実に20年、30年前の高校生より競技レベルがアップしていると感じます。世代優位の意識も手伝い、「自分が高校生だった頃の選手が肉体・技量とも最高である」と思いたい意識を捨て去ることができませんが、地方局で中継されている県予選を見れば、その差を認めざるを得ません。

投手の球速、打者のスイングスピード、パワー、技術とも圧倒されるような進歩を感じます。昭和時分の県予選1・2回戦などは投手の投げる球が山なりは当たり前、体格も細身で身長170センチ前後の選手が大半でした。身長が180センチもあれば大型選手と言われたものです。最近の190センチクラスで鈍重さを感じさせない身体能力を見せる選手には驚かされます。

どんなスポーツであれ、月日とともにトレーニング方法は着実に進歩しています。それはタイムを競う種目によって証明されます。陸上競技、水泳などで20年～30年間破られない日本記録や世界記録はありません。だからといって過去のアスリート達の記録を卑下するのは間違いでしょう。スポーツ史における進化の過程に軌跡を残した偉大な功績が色あせることは決してありません。

私はスポーツ、とりわけ高校野球について「昔の選手は凄かった」と思い出話をしないのです。経済でも同じことが言え「バブルの頃は凄かった」との話も見方を変えれば、これほど野暮な物言いは無いでしょう。スポーツ選手に倣って、記録を塗り替えればいいだけのことなのですから。



当社では毎年、たくさんの高卒生を迎え入れております。一人でも多くの若い力を大切に育て上げたい。社会の発展に貢献できる人材に成長させることを私がお約束します。会社を通して彼らの人生形成の役に立ちたいと存じます。

ぜひ大切な生徒様の進路検討に私の会社を加えて下さい。本日は、御精読ありがとうございました。

松本 隆一郎